


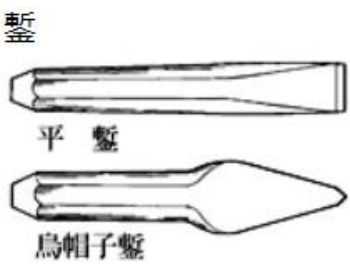








【古代】

用語	読み	解説	図版
車輪石	しゃりんせき	古墳時代前期に副葬品として使用された腕輪形石製品。碧玉や緑色凝灰岩で作られている。弥生時代の貝輪を模造したもの。	図1
鍬形石	くわがたいし	車輪石と同様の腕輪型石製品。形状が鍬の刃先に似ていることが名称の由来。ゴホウラ貝製の貝輪を模造したもの。	
蓋形埴輪	きぬがさがたはにわ	蓋(きぬがさ)は、古代、天皇・親王など位の高い人物の外出時に、背後からさしかざす長柄の傘。その形を模した埴輪。	図2
鞆形埴輪	ゆき(ゆぎ)がたはにわ	矢を携帯するための長方形の箱型の筒状容器。鏃(やじり)を上に向けて収納する。その形を模した埴輪。	図3
黒斑	こくはん	野焼きした埴輪につく黒色の焼きむら。窯で焼かれた埴輪にはつかない。	
象嵌	ぞうがん	金属などの素地に模様を刻んで、金・銀などの他金属材料をはめ込む技法。	
鑿	たがね	鍛冶で材料を打ち切る刃物。	図4
陪塚	ばいちょう(ばいつか)	古墳時代中期の大型前方後円墳の周囲に規則的に配置されている小型の古墳。人を埋葬せず副葬品だけを納めているものもある。	
衝角付冑	しょうかくつきかぶと	衝角とは、軍船の船首に取り付けられる体当たり攻撃用の固定武具。その形状に似ていることが名称の由来。	図5
帯金具	おびかなぐ	革・布製の帯の表面につけた金、銀、金銅製の飾り金具。古墳時代に主に伽耶(かや)地域との交流を通じてもたらされた。	
造り出し	つくりだし	古墳の墳丘に直接取り付く、方形又は半円形の壇状の施設。	
鋸齒文	きよしもん	鋸の歯のようにギザギザの模様。銅鐸、銅鏡、圜形埴輪に見られる文様で、邪を退けるという信仰がある。近代の着物の文様にも表れている。	図6
翳	さしば(さしは)	布などを張ったうちわ形のものに長柄をつけたもの。貴人にかざし顔を隠すのに用いる。	図7
赤色顔料	せきしよくがんりょう	古墳時代には、水銀朱(硫化第二水銀)、ベンガラ(酸化第二鉄)が用いられた。赤色は、生命、不老不死、魔よけを象徴した。	
石槨	せっかく	古墳の埋葬施設の一形式。棺の周囲を覆う施設を石材で築いたもの。石室は複数棺の収納が可能な空間を持ち石槨とは区別される。	
甗	こしき	蒸し器として使われた煮炊具の一つ。蒸気を通すために鉢の底に孔が開けられている。弥生時代後期、近畿地方に出現。	
鉄滓	てっさい	精錬又は鍛冶の際に、還元された鉄から分離された酸化鉄や夾雑物からなる物質。いわば鍛冶作業の「残りかす」。	
羽口	はぐち	炉で鉄を溶かすため、鞆(ふいご)から炉の中に風を送り込むための土製の管。	図8
鞆	ふいご	火力を強めるための送風具。古代には若鹿などの皮袋が用いられた。	
鐙	あぶみ	鞍から左右に吊り下げ、騎乗時に足を乗せる馬具。爪先を入れる部分が環のものを輪鐙という。	図9
須恵器	すえき	古墳時代後半(5C)に大陸から伝えられた製陶技術によって作り出された陶質土器。焼成には窯を用い、約1150度Cの還元炎を必要とする。	
焼き台	やきだい	斜面に造られた焼成窯に入れる土器の転落防止や安定させるための道具。	
甗	はそう	側面に注ぎ口の穴を穿った須恵器。竹などで作った筒状のものを穴にはめ、液体を注ぐ祭祀器具。源流は百済地方にあると考えられている。	図10

(参考文献) 日本歴史大辞典/小学館、広辞苑/岩波書店、特別展「はにわ大行進」配布資料/大阪歴史博物館

図版【古代】

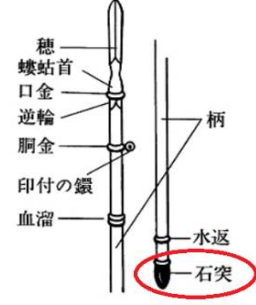


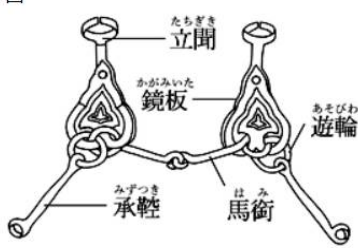

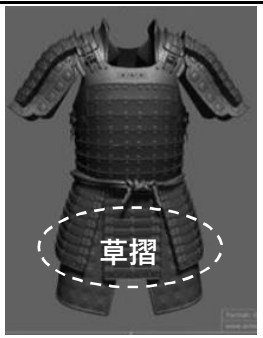

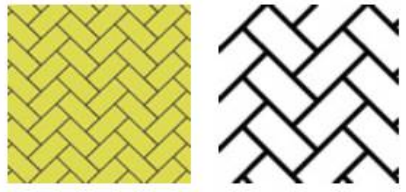


番号	図・写真	番号	図・写真
1	 <p>オオツタノハ貝の貝輪</p>	2	<p>蓋 きぬがさ</p> <p>図は学研国語大辞典より</p> 
3	<p>鞆 ゆき</p> <p>図は広辞苑より</p> 	4	<p>たがね</p> <p>図は広辞苑より</p>  <p>鋳 平 鋳 烏帽子鋳</p>
5	<p>衝角</p>  <p>この突き出し部分</p>	6	 <p>鋸歯文</p> <p>住吉大社本殿の囲い（鋸歯文）</p>
7	<p>翳 さしば</p> <p>図は広辞苑より</p> 	8	<p>復元鍛冶炉 （羽口、鉄滓）</p> <p>交野市歴史 民俗資料館 より</p> 
9	<p>鐙 あぶみ</p> <p>図は広辞苑より</p>  <p>洋鐙 輪鐙 武蔵鐙 舌長鐙</p>	10	<p>甗 はそう</p> 

【古代】

用語	読み	解説	図版
塼、磚	せん	レンガのこと。土を焼いて方形又は長方形の平板にしたもの。敷瓦、壁体化粧材などに使用。飛鳥・奈良時代に作られた。	
韓式土器	かんしきどき	朝鮮半島の器形や製作技法をまねて作られた土器。焼き方の違いから、軟質土器(野焼き)と陶質土器(窯焼き)の2種類に分かれる。陶質のものは甕が多い。	
大嘗祭	だいじょうさい	天皇が即位後、初めて行う新嘗祭。その年の新穀を献じて天皇自ら天照大神、天神地祇を祀る。新旧首長交代の儀礼が変化し古墳終末期頃から始まった。	
葺石	ふきいし	墳丘斜面に礫(れき)を葺くこと、或いはその礫。まれに墳丘頂や段の平坦面にも敷く場合がある。古墳の外観を荘厳化、土の流出防止の設備。	
石突	いしづき	矛・槍・長刀などの柄の端の地面を突く部分。またそこを包んだ金具。	11
鱗付 円筒埴輪	ひれつき えんとうはにわ	円筒埴輪の左右に魚の背びれ胸びれのように、上下に長い長方形の板状の鱗をもつもの。	12
形象埴輪	けいしょうはにわ	単純な円筒形の円筒埴輪に対し、種々の人工物や自然物をかたどった埴輪。家形埴輪、器財埴輪、動物埴輪、人物埴輪の4つに大別される。	
鉄鏃	てつぞく	鉄製の鏃(やじり)。弥生時代前期末に出現し、以後大型化する。古墳の副葬品として同一形態のものが多量に出土する。	
三尾金具 (三尾鉄)	さんびかなぐ	冑の頭頂部に装着し、尾部の3本の棒状部分に雉の羽のような矢羽根を括り付け飾りとしていた。近畿地方を中心に20余り出土。	13
三環鈴	さんかんれい	3個の鈴を銅の輪でつないだ馬具の一種。甲冑の飾りとする説もある。	
轡	くつわ	馬の口にはませて、両端に手綱をつけて馬を御するための馬具。	14
縄蓆文	じょうせきもん	土器の表面についた縄目状の圧痕。縄を巻き付けた板でたたいて成形した時についた縄の痕跡。	
刀子	とうす	刀の小形のもの。長さ約20cm以下のものをさす。	
位至三公 鏡	いしさんこう きょう	この鏡を持てば皇帝に次ぐ位に就くことができるという言葉「位至三公」が刻まれている銅鏡。3C後半、中国の西晋で流行した鏡。北九州で多数出土例がある。	15
三公	さんこう	中国で最高位の3つの官職。周では太師、太傅、太保。前漢では丞相、大司馬、御史大夫、又は、大司馬、大司徒、大司空。	
草摺	くさずり	鎧の胴の下に垂れて大腿部を防護するもの。	16
鉄鉗	かなばし	鍛冶で、焼けた鉄を挟むのに用いる道具。	
石見型 埴輪	いわみがた はにわ	奈良県三宅町の石見遺跡で出土し後期に各地で盛行した特殊な形象埴輪。盾の形象と考えられていたが、近年、権威を表す儀仗(ぎじょう)という説もある。	17
檜垣文	ひがきもん	檜の薄板を網代のように斜めに組んだ文様。14C後半から15Cの信楽を代表する文様。	18
木芯 粘土室	もくしん ねんどしつ	石材の代わりに、木材を組み上げて構造部とし、それを粘土で覆った埋葬施設。	19
竜山石	たつやまいし	兵庫県高砂市竜山周辺で産出される流紋岩質凝灰岩。加工に適した硬さと粘りがあり、「大王の石」として大王、有力豪族の石棺に利用されている。	
長持	ながもち	家具の一種。衣服・調度などを収納する蓋付の長方形の箱。担金具(にないかなぐ)に竿を通して前後2人で担いで運搬する。	
土師器	はじき	弥生土器の流れの野焼き(酸化焰焼成)で焼成。考古学による区分ではなく、埴輪作りの祖とされる土師氏による手工業品として弥生土器と区分される。	

(参考文献) 日本歴史大辞典/小学館、広辞苑/岩波書店、特別展「はにわ大行進」配布資料/大阪歴史博物館

図版【古代】


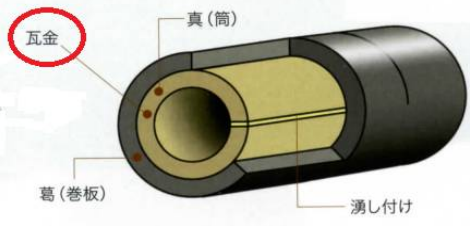
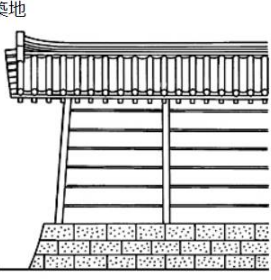
番号	図・写真	番号	図・写真
11	<p>石突 いしづき</p> <p>図は広辞苑より</p> 	12	<p>緒付 円筒埴輪</p> 
13	<p>三尾金具 (三尾鉄)</p> <p>図は 九州国立博物館より</p> 	14	<p>轡</p> <p>図は 広辞苑 より</p> 
15	<p>位至三公鏡 破線内に「位至三公」 の文字</p> <p>図は山口市 赤妻古墳出土の鏡</p> 	16	<p>草擦</p> 
17	<p>石見形埴輪</p> <p>図は 菅原東遺跡 (奈良市) のもの</p> 	18	<p>檜垣文</p> 
19	<p>木芯粘土室</p> <p>図は 檜尾塚原 8 号墳 (堺市南区) の 内部</p> 	20	<p>長持</p> <p>図は、 府中家具 木工博物館 より</p> 

【中世/近世】

用語	読み	解説	図版
具注暦	ぐちゅうれき	奈良・平安時代に流行した暦本(太陰暦)。漢文で歳位・星宿・干支・吉凶などを具(つぶさ)に注す。陰陽寮の暦博士によって編纂。	
御記	ぎよき	天皇や貴人の手になった日記、記録。「ごき」とも読む。	
尾栓	びせん	火縄銃の銃底を塞ぐネジのこと。火縄銃には黒色火薬が使われており、火薬の残りかすを除去するために尾栓を開ける必要があった。	
黒色火薬	こくしょくかやく	硝酸カリウム(硝石)、木炭、硫黄からなる3成分混合火薬。日本では天然の硝石が産出しないため東南アジアなどから輸入した。	
カルカ(さく杖)	かるか(さくじょう)	ポルトガル語のcalcadorに語源がある。火縄銃は弾を前込めする方式で、銃の弾を筒口から押し込めるための棒。	21
瓦金	かわらがね	火縄銃の銃身部分とする細長い矩形の鉄板。	22
彫金	ちょうきん	鑿(たがね)を使って金属に彫刻を施すこと。また、その技法。	
向付	むこうづけ	懐石料理で、膳の向こう側に配する料理、またその器具。膾・刺身・酢の物などの料理。	
差文	さしぶみ	法会や祭事などの際に、諸役に当たるべき者を指名して定めたことを通達する文書。差定(さじょう)ともいう。	
築地	ついじ	板を芯にして両側を土で塗り固めた塀。ふつう一間ごとに木の柱を立て、瓦などで屋根を葺く。築地塀。	23
茶頭	さどう	安土桃山時代以降、茶の湯の事をつかさどる役。「さじゅう」とも読む。	
矢銭	やせん	箭銭とも書く。戦国時代に大名などが臨時に賦課した軍用資金。織田信長は1568年(永禄11)、堺に2万貫(現在の約20億円相当)の矢銭を課した。	
柿(こけら)葺	こけらぶき	木材を細長く削り取った板で屋根を葺くこと。また、その屋根のこと。代表的なものは室生寺金堂、桂離宮古書院の屋根など。	
御旅所	おたびしょ	神社の祭礼に、神輿(しんよ)が本宮から渡御(とぎよ)して仮にとどまる所。	
壇像	だんぞう	梅檀(せんだん)・白檀(びやくだん)などを材とし緻密に彫刻した仏像。	
天領	てんりょう	江戸幕府直轄領の通称。江戸時代の法令では、御料(領)、公儀御料所、御代官所。元禄期には47ヶ国に分布、400万石台となった。堺もその1つ。	
会合衆	かいごうしゅう	15C後期から16C末、都市内の裁判、徴税、市場管理などを自治的運営した合議機関。商人を主体とする有徳人(うとくにん)10~30名前後で構成。	
惣	そう	中世後期社会において公的な存在として認定された自治的組織。「惣」は全体を意味する言葉で、様々な組織・集団に出現した。	
緞通	だんつう	中国語の「毯子(タンツ)」に対する当て字。地糸に綿・麻又は羊毛などの毛を用いた厚い敷物用パイル織物。江戸期に佐賀・赤穂・堺で生産を開始。	
大僧正	だいそうじょう	僧綱(そうごう:法務統轄僧官)の一つ。僧正の上位。745年(天平17)に行基が初めて任ぜられた。大納言に準ずる。現在、各宗で最高の僧階。	
布施屋	ふせや	奈良・平安時代、調・庸の運搬者や都での役務に向かう旅行者のために駅路に設けた宿泊所。多くは僧侶による慈善事業。行基による9ヶ所の布施屋がある。	

(参考文献) 日本歴史大辞典/小学館、広辞苑/岩波書店、特別展「はにわ大行進」配布資料/大阪歴史博物館

図版【中世/近世】

番号	図・写真	番号	図・写真
21	<p>カルカ</p> <p>銃口</p>  <p>図は 名古屋刀剣 博物館より</p>	22	<p>瓦金</p>  <p>図は 鉄砲・大砲 大図鑑より</p>
23	<p>築地</p>  <p>図は 広辞苑より</p>	24	
25		26	
27		28	
29		30	

## 考古学用語の由来・定着までの経緯について

V1

用語	読み	解説
埴輪	はにわ	<p>「埴」とは、きめの細かい黄赤色の粘土。別名：あかつち、へな、はにつち。古代人は埴に神秘的な呪力があると信じ信仰の対象であった。神話の埴安神(はにやすのかみ)は伊弉諾尊の子で土を司る神。</p> <p>『倭名類聚抄』巻1・地部第2・塵土類第8・13丁裏3行目に「埴」の説明として「釈名云土黄而細密曰埴常職反[和名波爾(はに)]」とある。</p> <p>「輪」は、①輪のように並べたという説、②と筒型の埴輪(円筒埴輪)の形からという説、③粘土紐の輪積み、巻き上げからついたという説がある。</p> <p>「埴輪」の初見は、日本書紀の垂仁天皇紀32年の条「日葉酢媛命之墓。仍號是土物謂埴輪、亦名立物也(埴輪又は立物と呼んだ)」</p> <p>【参考文献】 『広辞苑』、『大修館全訳古語辞典』、『大辞泉』、『日本大百科全書』</p>
陶(すえ) 須恵器	すえき	<p>平安期には「すえもの」、「すえうつわもの」、江戸期には行基焼、勾玉壺、明治期には祝部(はふりべ)、斎瓮(いわいべ)、朝鮮土器と呼ばれていた。陶器(とうき)との混同を避けるため、昭和期に後藤守一博士(1888年～1960年 考古学)によって、「須恵器」が提唱された。</p> <p>陶(すえ)の初見は、日本書紀の垂仁天皇3年の条「近江国鏡村谷陶人(すえびと)、即天日槍之従火人也」、雄略天皇7年の条「以新漢陶部(すえつくり)高貴」。「陶」の発音は古語「すゑ(スヴェ)」。古代朝鮮語でSueは鉄を意味する。</p> <p>【参考文献】 『年代のものさし 陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『須恵器の美と技と』熊本県立装飾古墳館 1994 『須恵器 研究入門』中村浩 柏書房 1990</p>
土師器	はじき	<p>『日本書紀』雄略天皇17年条には、贄土師部(にえのはじべ)という部民の存在に関する記述。『延喜式』巻24「主計上」7条畿内には、大和国「贄土師」が甕28口、河内国「贄土師」が甕形(金属製の椀)を270口を貢進したという記述。『倭名類聚抄』には、土師という郷名が12ヶ所あり、読みは「波爾之(はじし)」とある。</p> <p>土師器は弥生土器の製作技法の系譜にあり、さらに須恵器の製作技法によって作られた土師器も存在し、一概に製作技法、焼き上げによって定義できない状況にある。近年では、土師器のほか、須恵器系土師質土器、回転台土師器、土師質土器という呼称で区分する見方もある。現在では、古墳出現後から中世的社会形成段階以前までの土器を土師器と定義している。中世以降は、「ほうろく」、「かわらけ」と呼ばれた。</p> <p>考古用語としての「土師器」が定着するまでは、「埴部(はにべ)土器」、「埴瓮(はにべ)土器」と称されていた。</p> <p>【参考文献】『日本大百科全書』、『日本歴史大事典』、『倭名類聚抄』</p>
鍬形石/ 車輪石	くわがたいし/ しゃりんせき	<p>江戸中期の奇石愛好家・鉱物学者である木内石亭(1724～1808 近江国坂本生まれ)が『雲根志(うんこんし)』三篇(安政8年出版)にて命名。江戸時代には石釧と合わせて神代石と総称されていた。大正期に高橋健自氏によって腕輪形石製品が宝器であるという考察がなされ、昭和初期には、小川敬養氏、大野雲外氏らによって、祖型が貝輪にあることが発表され、その後、研究者諸氏によって考察されるなかで名称が定着した。</p> <p>【参考文献】 『腕輪形石製品の名称とその用途』関西大学 福田誠志 1995 『事典 墓の考古学』土生田純之編 吉川弘文館 2013 『日本大百科全書』、『日本歴史大事典』</p>